



筑摩世界文學大系

50

コンラッド

上田 勤 日高八郎
鈴木建三 高見幸郎
橋口 稔 訳



ノストローモ
ナーシサス号の黒人 青春

筑摩書房

筑摩世界文學大系 50

昭和五十年十二月二十日

初版第一刷発行

コンラッド

訳者代表

鈴木建三

発行者

井上達三

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番号一〇一―九一

電話東京二九一七六五一
振替口座東京六一四一二三

印刷

三晃印刷

製本 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0397 (製品) 20650 (出版社) 4604

Printed in Japan

目次

ノストローモ

ナーシサス号の黒人

青春

「壮大な幻想」——コンラツド
と『ノストローモ』

年譜
解説

上田勤
日高八郎
鈴木建三 5

高見幸郎 289

橋口稔 384

ペン・ウオーレン
大熊栄 405

鈴木建三 422
435

コン
ラ
ッ
ド

ノストローモ

海辺の町の物語

ジョン・ゴールズワージーへ

そんなにひどく掻きくもった空は、
あらしが吹き荒れなくては、晴れあ
がらぬもの

シエイクスピア (『ジョン王』
四幕二場)

作者の覚書

『ノストローモ』は、短篇小説集『嵐風・その他』(『嵐風』『エイ・フォー・スター』『フォー』の四篇を含む。一九〇三年刊)の出版に続く時期に次々と書かれた長篇小説の中で、わたしが最も深い危惧の念を抱きながら構想した小説である。

こう申しても、わたしの物の考え方なり、著作生活の仕事に対するわたしの態度なりに、なにか変化が起ころうとしていることに、当時わたし自身が自覚しかけていたというわけではない。恐らく変化などにも生じていなかったといつてよからう——芸術理論にはなんの關係もない、あの神秘的な天来のものたる「靈感」における、微妙な質的变化を除いては。しかし、

そういう変化の現象は、いかなる意味においても、わたしの関知しないところである。それはともあれ、わたしに多少の危惧を与えたのは、短篇小説集『嵐風・その他』に収められた最後の短篇を書き終えたのち、どういふものか、世の中にはもうこれ以上書くことがないように思われたことだった。

しばらくの間、わたしは、こういう妙に消極的な、しかし厄介な気分に取りつかれた。が、やがて、わたしの長篇小説の誕生の多くがそうであったように、『ノストローモ』の最初のヒントが、重要な細部を全然欠いた取り留めのない裏話の形で、わたしにもたらされたのであった。

打ち明けて申し上げると、わたしもごく若かった一八七五年だったか、それともその翌年だったかに、西インド諸島で、いや正確にはむしろメキシコ湾で——というのは、わたしの陸地との接触は短期間だったし、回数も少なく、一時的だったから——わたしは、革命のどさくさ紛れに、ティエラ・フィルメ海岸のある場所、一杯分ほどもある銀を、たった一人で盗んだ男の話を聞いたのであった。

表面だけから見ると、これはどこか離れ業といつてもよいたぐいのものだった。しかし、詳しいことはなにも聞かなかったし、わたし自身犯罪というものに特別興味を持ってもいなかった。その話も記憶に留めておこうとは思わなかった。事実わたしは忘れてしまっていたの

だが、それから二十六、七年経って、偶然古本屋の店先で手にした一冊の薄汚ない書物の中で、その話そのものにぶつかったのである。それはあるジャーナリストの手助けを受けながら書いたアメリカの一船員の自叙伝だった。世界各地を放浪する間に、そのアメリカ人の船員は一隻の帆船で数カ月働いたことがあった。ところが、その船の所有者で船長を兼ねている男は、わたしがごく若かったころから聞いていた盗賊だったのである。これについては、わたしはなんの疑問も持っていない。なぜなら、世界の同じ場所、ああいう風変りな離れ業が二度も行なわれ、そのどちらも南アメリカの革命と関係があったなどとは到底考えられないから、その男こそが、実際に、まふまと銀を積んだ船を盗んだ本人に違いない。そして、仕事が行まく運んだのは、ひとえに彼が雇主たちに内々信用されていたからしかなかった。彼らは人を見る眼が呆れるくらいなかったに違いない。その船員の自叙伝によれば、彼は根っからの悪党で、けちな詐欺師で、あほらしいほど癡猛であり、その上気難かしく、風采も卑しく、こうした機会が彼に投げ与えたああいう大事業にはまったく不相応な男として描かれている。面白いのは、彼自身公然とそれを自慢していることであつた。

彼は口癖のように言うのだった。「世間は、わしがわしのこの帆船で一財産つくるものと思つている。しかし、それはわしには意味のないことだ。わしはそれには関心がない。わしは、

ときどきそつと出かけて行つては、銀の延べ棒を一本引き揚げてくる。そうやってだんだんと金持になるといふ寸法なんだ」

その男には、もう一つ、変わったところがあつた。あるとき、なにかの口論で、そのアメリカの船員が彼を脅迫したという。曰く「あんたは銀の話をあつしに打ち明けてくれたが、あつしが陸へ上がつて密告するのをどうやって防げると思つてますかい？」

皮肉なその悪党は少しも驚かなかつた。事実、声を上げて笑ひええした。「阿呆だなあ、おまえは。陸へ上がつてわしのことをなんだかんと言つてみる、背中をぐさりとやられるのが落ちだろ。さ。あの港の連中は、男も女も子供も、みんなわしの味方なんだぜ。解は沈んだんじやないって、いったい誰が証明できるんだ？ 銀をどこに隠したか、わしはおまえに教えちゃいないぞ、え、そうだろ。だからおまえはなににも知らないと同じなんだ。第一、わしの話が、もしみんなほらだとしたら、どうなんだ？ え？」

とどのつまり、その水夫は、改悛の情など露ほどもないこの盗賊の卑しい貪欲に嫌気がさして、その帆船を去つたのである。このエピソードは、彼の自叙伝でわずか三ページしか占めておらず、取り立てていうほどのものではなかつた。しかしながら、わたしがそのくだりを読んだときに、わたしがごく若かつた時分たまたま小耳にはさんだ話が奇しくもこの箇所で確認さ

れたのである。思えば、はるかな往時の日々の記憶が、思いがけず喚起されたのであつた。當時は見るもの聞くもの、すべてが新鮮であり、驚異であり、スリルに満ちており、興味津々たるものであつた。星空の下のエキゾチックな海辺、さんさんと陽光を浴びた山々の投影、おぼろげな記憶の中に残る人々の情熱、半ば忘れられた噂話、薄れてしまつた人々の面影等々……：恐らく、恐らくは、この世界には、まだ描き出すべきなものがかまだ残つていたのだ。だが、このささやかな裏話だけからは、最初わたしの悪党が非常に高価な財貨を多量に盗むという噂がある、真偽のほどはともかくとして、それ自体としてはなんの価値もない。その窃盗がどう行なわれたかの状況説明をあれこれ考え出すなんてことは、わたしにはぞつとしなかつた。そもそもわたしはそういうことは得意でなかつたし、したがつてむりにそういう仕事をしても結果は知れていと思ふたのだ。この財貨を盗んだ男が必ずしも常習的な悪漢とは限らない、逆に、本来は立派な人物であつて、猫の目のように変化する革命の流動的な状況の中を縦横に活躍した男で、しかも恐らくはその犠牲者であつたかもしれない——その可能性は十分あり得るというところにわたしは思ひついたとき、そのときはじめてわたしは、黎明期を迎えようとする一つの国の姿を心に描くようになったのであ

る。それが、あの高くそびえ陰影の多いシエラ山脈と、霧に包まれた大草原のあるあのスラコ地方になつた。そしてこれらの大自然は、善悪を問はず、目先のことだけに追われてあくせくしている人間たちのもろもろの情熱から生じる悲劇・喜劇を、ただ黙然と見つめていたのだ。

こういつたところが、実際、『ノストローモ』つまりこの本のひそかな芽ばえであつた。思うに、その瞬間から、これはごらんのような作品に結晶するほかなかつたのである。しかし、そのときでさえ、わたしにはまだためらいがあつた。わたしの自己保存の本能が、わたしにこう警告しているように感じたのだ。——陰謀や革命に満ちている国へ足を踏み入れるな、でない」と長い間苦勞するぞ、と。しかし、あえてわたしはその旅へのぼらざるを得なかつたのである。その仕事は、一九〇三、四年の大部分を要したが、その間も新しく起くる躊躇の気持に、わたしは何度かペンが先へ進まない時期を経験した。その国に対するわたしの知識が多少とも深くなるにつれて、わたしの前途に際限もなく広く開けてくる展望の中に、己れを見失つてしまふのではないかと恐れたのだつた。また、この共和国の錯綜した事態の中で、わたし自身全く動きがとれなくなつてしまつたように思つたときは、比喩的な言ひかたをすれば、わたしはしばしば気分転換のために、身の廻りの品をまとめてはスラコから逃げ出し、『海の鏡』(旅行記)

なかつた。自分が民衆の中の一個の力であると感じることで満足なのである。

しかしノストローモがこういう人物になつたのは、主としてわたしが若かつたころ、地中海出身のある船員からこの人物のインスピレーションを得たからである。わたしの作品のなんべいジカをすでに読んで下さつた人たちは、あのトレモリノ号の船長のドミニックが、ある状況の下ではノストローモのような人物になつたかもしれないというときに、わたしのいう意味をすぐに分つて下さると思う。ともかくドミニックだつたら、この年下の男を完全に理解したに違ひなかつた——非常に軽蔑したにせよ。彼とわたしとは、一緒にかなり馬鹿げた冒険に従つていた。しかし馬鹿げているということ自体は問題ではない。ずっと若かつたころでもこの男の半ば辛辣なところのある忠実さや、半ば嘲笑的なところのある傾向を受けるに価するようなものがわたしにあつたらしいと考えると、わたしは実に満足なのである。ノストローモがしやべることの多くは、最初ドミニックの口から聞いたのである。舵柄に手をおき、顔を翳らしている修道士のようなフードから、その恐れを知らぬ目で地平線のあたりを見まわし、その情容赦のない鋭智を示すときにいつもまず最初に、それは痛烈な調子で「あんたたち、旦那衆は！」^{グランド・ジャコ}というのだつた。その調子の烈しさは未だにわたしの耳に残っている。ノストローモそっくりなのだ！「あんたたち、旦那衆は！」^{オフレックス・フェイス}まっ

たくノストローモそっくりなのである。ただドミニックはコルシカ人で、自分の先祖に対してある誇りを持つていた。ノストローモはそういうものにはこだわらない。というのは、彼の家系はさらにもっと古いということにならざるを得ないのである。ということは、数え切れぬほどの世代の重みが彼の背にのしかかつており、しかも誇りとするような祖先は誰一人持たない男なのだ……いかにも一庶民そのものらしく。

彼が受け継いだ土地にしっかりと結びついてゐること、その不用意さと寛大さ、才能の浪費、男性的虚栄心、己れの偉大さに対する漠とした自覚、それに献身したいと望むことと自分がすでに絶望的な状態で、なおかつほとんど成しあつたわざることと献身しようとするあの忠誠において、彼はまさしく民衆の中の男であり、外から指導していくことを軽蔑し、人々の中にあつて内から人々を支配して行く型の、他人がまつた嫉妬心を抱く必要のない、まさしく民衆そのものの力だつた。幾年かののち、相当な年輩となつてからは有名なフィダンザ船長となつて、その国に相当の影響を持つようになり、近代化したスラコの街路で人々の敬意に満ちた目に見送られながら仕事で東奔西走し、沖仲仕の寡婦を訪問するかと思へば、宿屋で行なわれる会合に出席し、そこで無政府主義者の演説に微動もせぬ沈黙のうちに耳を傾けるのだつた。こうして新しい革命の動きに対するこの謎のような後援者、信頼された富裕な同志フィダンザは、

胸の中にしまひこまれた己れの精神的な荒廢の自覚を持ちながら、なおかつ本質的には民衆の一人だつたのである。彼が人生に対して愛と輕蔑をなげにたてた感情を抱いている点において、そしてまた、裏切られたのだという呆然とした確信、何によつて、あるいは誰によつてかよく分らないながらも、しかも裏切られながら死んで行くのだという確信において、彼はなお民衆の一人なのであり、彼自身の私生活の歴史を持つてゐるにしてもなおかつ彼は民衆の疑う余地のない偉大な人物なのである。

さてここでわたしは、このような動乱期のもう一人の人物のことに言及しておきたい。それはアントニア・アベリャノス、あの「美わしのアントニア」である。この女が、實際のラテン・アメリカ娘の典型かどうかは、わたしには敢えて確言することはできない。しかしわたしにとつては彼女はそうなのである。わたしの畏友である彼女の父親のかたわらで、つねにわずかに背景に退いているにせよ、わたしが言ひたかつたことが分つて貰えるくらいには結構彼女も浮き彫りされていることをわたしは希望している。わたしとともに^{オシシ}西部共和国の誕生を見た人々の中で、彼女一人だけがわたしの記憶に今なお生き続けている人物である。貴族のアントニアと民衆の人ノストローモは、ともに新時代を作つた職人、新しい国家の眞の創造者なのである。彼はその伝説的にすらなつてゐる大胆不敵の離れ業によつて、また彼女はただそこ

に存在するだけによって、すなわち軽卒な人間の心に一つの真面目な情熱を呼び起こすことができるただ一人の存在であったということによって、このようなことを成し遂げたのである。

もしわたしにストラコを再び訪れるようにさせるものがあるとすれば（わたしは様子が一変してしまったストラコを見ることを憎むだろうが）、それはアントニアをおいてほかにない。そしてその本当の理由というのは——思いきり率直に打明けてもお許しを願えると思うから述べるが

——本当の理由とは、つまり彼女はわたしの最初の恋人がモデルだったということなのである。われわれ、やや背が伸びてきた一群の少年たち、つまり彼女の二人の弟の仲間たちは、教室から彼女が出て来るのを、ある一つの信念の旗手として、讃嘆の気持で眺めていたのだった。われ

われはみなその信念のために生まれ来たのであったが、彼女のみがその信念を、不屈の希望をもつて、いかにして高く掲げるかを知っていたのだった！ 恐らく彼女は、アントニアより熱烈な魂を持っていたろうが、清冽さには乏しかったかもしれない。しかし彼女は、ちりほどの世俗的な汚れも持たず、妥協も知らない清教徒的な愛国者であった。この娘を恋したのはわたし一人ではなかったが、最もしばしばわたしの軽薄な点について彼女から酷しい批判を受け——まさにあの憐れむべきデクターそっくりにだ——、そしてまた、彼女の容赦しない、答えるすべもない非難の矢面に立たなければならな

ったのはわたしだった。もつとも彼女がわたしをよく理解していたわけではなかったが、そんなことは問題ではない。心はおびえながら、しかもそれだけに反抗的になつてゐる罪人のように、わたしが最後の別れを告げに彼女の部屋に行つたあの午後、彼女はわたしの手をきつく握りしめた。ためにわたしの心は高鳴り、彼女の目に涙が浮かんでゐるのを見てはつと息を呑んだものだ。彼女はこの最後の時にはじめて、まるでわたしが本当に永遠に去つてしまふのだと、遙か遠隔の地に——われわれの目から隠されてブラジルの湾の闇の中に人知れず横たわつてゐるストラコまでも——去つてしまふのだということが突然判明したかのように（わたしたちはそんなにも子供だったのだ！）やさしくなつたのであった。

これが、わたしがときにあの「美わしのアントニア」に一目会いたいと思う理由なのである（あるいはもう一人の別の方なのだろうか？）

——寺院の薄暗がりの中を歩み、ストラコの最初にして最後の枢機卿Ⅱ大司教の墓に向かつて短い祈りを捧げ、父ドン・ホセ・アベリャノスの記念碑の前に、娘らしい憧れに耽りながら立ちつくし、マルタン・デクターへの大理石の浮彫りの記念碑に、立ち去り難いやさしい誠実な一瞥を与え、からだはしゃんとしているものの、髪はすっかり白くなつた姿で、広場の陽光の中を静かに出て行くアントニアに。すでに彼女も、もう一つの新時代の夜明けを、さらに多くの革

命の到来を待ちこがれてゐる男たちからは目もくれない過去に遺物になつてしまつてゐたのである。

しかしこれは全く取りとめもない夢物語に過ぎない。なぜなら、あの根っから庶民である男、偉大な沖仲仕頭の肉体から最後の息がとだえ、彼が愛と富の勞苦から最終的に自由になつた時を最後に、それ以後なに一つないということを、わたしは痛いほどはつきり認識していたのだから。

一九一七年十月

J. C.

第一部 鉱山の銀

第一章

スラコの町は、オレンジ園のこぼれんばかりに美しい繁茂からも察しられるとおり、非常に古い町であったが、スペインの支配下にあった時代およびそれ以後も長期にわたって牛皮とインディゴによる沿岸貿易などで、多少の賑わいをみせた港町に過ぎなかった。現代の快速帆船であれば、帆をばたつかせるだけの風で漸進もするのだが、往時の征服者たちが走らせた、遠洋航海用の鈍重なガリオン船となれば、そよ風くらいではびくともするはずがなかった。であつたればこそ、つねに無風静穏の広大な入江に守られて、スラコの町は、今日まで、さいわいにして侵略者の毒牙を免かれることができたのであつた。世界の七つの海には、寸分の油断も許さぬ暗礁や荒磯のために、船舶の接岸も容易ではない港湾も数々あるが、スラコの町は、喪服の髻にも似た黒雲のたなびく峨々たる山脈を、ちょうど城壁のようにめぐらした、奥行の深いブランド湾（（静かな入））——それは遙かに大洋を見渡す、無蓋の半円形の大伽藍にも譬えられよう——の、壮嚴極まる忌わしい商業世界の

甘い誘惑にも捲き込まれることもなく、神聖にして侵すべからざる聖域として残されてきた。

コスタダナ共和国の海岸線はおおむね直線を描いているが、その中にあって、このブランド湾は一大彎曲をなしている。そして、この彎曲した海岸線の一端が突出して、ささやかな岬を造っているが、人これ呼んでブンタ・マラ（（凶の岬））という。この地点は、入江の中央からはまったく見えないが、その背後にそそり立つ峻険な山の肩のあたりは、淡い影のように、ぼんやりと空に浮くのが眺められた。

眼を入江の他の一端に転じると、青味を帯びた一片の霞と見まごうものが、きらきらと光る水平線上に、かるやかに浮かんでいる。これがアスエラ半島であつて、ここでは、切り立った岩と、断崖絶壁の峡谷によつて切断された岩の台地とが、野放図に入り交じつていた。アスエラ半島の首根の部分は細長く、棘のある灌木の茂みで一面覆われていたが、その首根から上の岩だらけの頭の部分は、緑の衣をまとつた海岸線から海に向かって遠く延びている。ここにはまったく水がないが、それというの、いったん降つた雨は、そのまま岩を伝つて、海に流れしてしまうからにはかならず。ここには、呪いがいつさいの生命を枯らしてしまつたかのように、一本の草を育てる土もないという。貧しい土民たちは蒙昧きわまる自慰的な本能から、悪と富の二つの観念を結びつけ、この土地に木一本生えていないのは、この土地のどこかにひそかに

かくされている財宝のためだと語るのである。

近隣の一般人とか、農場の作男とか、この海岸に沿つた平野の牛追ひとか、一束のサトウキビや、三ペンスもしないようなトウモロコシなどを入れた籠をぶら提げて、何マイルもの道を交易のためにやつて来るおとなしいインディオたちは、すべてこのアスエラ半島の岩の台地に刻まれた深い絶壁の暗闇のなかに巨大な量の輝くばかりの金が隠されていることを信じていた。

伝説によれば、昔からこの宝探しのために身を亡ぼした人間も少なくないとか。これも伝説の一つだが、まだ現存の人の記憶でも、二人のさまよえる水夫（どうやらアメリカ人らしかったといわれているが、少なくとも外人であることは確かだった）がやつてきて、博打好きでほかにはなんの取柄もない一人の若者を説き伏せ、三人で、乾いた薪一束、水の入った皮袋、四、五日は十分にもつと思われる食糧を運ぶために驢馬を一頭盗みだした。こうして一味は驢馬を従え、腰にピストルを差し、半島の首根の砂地を、棘だらけの灌木を鉋で叩き切りながら、奥へ進んで行つた。

二日目の夕方、一条の煙がまっすぐに立ちのぼるのが見えた（この煙はこの三人の野宿したときのものであることは明らかだった）。剃刀のように尖つた岩の峰の上にかすかにのぼるこの煙は、このあたりでいままで見たとのこないものだった。たまたま、三マイルの沖合に碇泊していた、沿岸航路用のスクーター船の乗組員

たちは、暗くなるころまで、この煙を驚きの目で凝視しつづけていた。また、近くの小さな入江の一軒家にひっそりと住んでいた黒人の漁師は、煙が立ちのぼるのを見て、それがなにかの知らせではないかと目を凝らしていた。彼が妻を呼びつけたのは、ちょうど日が西に沈もうとしたときだった。彼らは、この異様な前兆を、羨望と疑惑と畏怖の眼で見守り続けた。

神を恐れぬ三人の冒険者たちは、一条の煙以外にはなんのしるしも残さなかった。この後、この二人の船員と、インディオと、盗まれた驢馬は、二度と見られなかった。インディオの若者はもともとスラコの町の者だったが、残された彼の妻は、夫はすでにこの世にいないものとして、金を払って何回かミサを挙げ、その冥福を祈った。なんの罪もない哀れな四つ足もまた、無事昇天を許されたものとみなされる。だが外国人である二人の船乗りについては、彼らは財宝を探しあてながらもその呪いをあび、外に出られず、今なお幽鬼のごとくにそのあたりに生きつづけていると信じられている。つまり、二人の魂は彼らが見つけ出した財宝を守ろうと執着する身体から、どうしても離れようとしないのである。すでに大金持になりながら、彼らは飢え、渴いている。——キリスト教徒ならば、はるか昔にこの世をあきらめ解放されているにちがいない。だがこの傲慢不遜の異端者の外国人の執念は、飢えと渴きで骨と皮ばかりになっても、なおも昇天できずにいるのだ——と、こ

う伝えられている。

これがつまりこの禁断の財宝を護っている伝説的なアスエラの住人である。一方には空に影を落とす巨大な山影、他方にはきらきらと輝く水平線の縁に朦朧と浮かぶ円形の青色の霞——これがブラシド湾（なんびとも、ここに強風が吹いた例を知らない）と名づけられている彎曲部の二つの先端を成している。

ヨーロッパからスラコに向かつて来た帆船は、プンタ・マラとアスエラ半島とを結ぶ線に達するや、大洋ではうなりを立てていた強風を突如失うのである。そして、ときには気まぐれなそよ風に捕えられて、三十時間も連続してもてそそばれることもあった。一年の大半というものの、この静かな湾の先端は、微動だにせぬ、不透明で巨大な雲の塊りで覆われている。まれに晴れている日があると、湾面にもう一つの影がその蔭をおとす。朝の曙光が、鋸状に聳える脊梁山脈の背後から輝き始めると、海岸間近から柔でに聳えはじめる森林の台座の上にその急斜面の上に黒い山の頂がいくつもくっきりと浮かび上がってくる。こうしてその黒い頂きの間には白く光るあのイグエロータ山の山頂が、まっ青な背景の上にその莊嚴な姿を現わす。そこには、突出した巨大な岩塊が、小さな黒点となつて、滑らかな雪のドームの上に点々と見えている。

太陽が中天に進み、山々の長い影が湾から消えていくにつれて、峡谷の底を包んでいた雲は

上方へ捲き上げられ、さらに陰鬱な塊りとなつて、木で覆われた斜面の上の断崖の露出した岩肌にまつわりつき、あるいは峰々を覆い、荒々しい煙雲となつて、イグエロータ山に頂く雪の上をかすめていく。こうして脊梁山脈の峰々が、巨大な黒灰色の雲の塊りの中へとその姿を没すると、この雲はさらにゆっくりと海に向かってひろがり、真昼の熱気の前に海辺一面にひろがる淡い空気のなかに消えてゆくのだ。雲の峰の動いている先端部は、湾の中央部まで張り出そうとする。だがこれが成功することはめったにない。それは、船乗りたちの話によれば、太陽が雲を食ってしまうからにはかならない。ときたま、陰気な積乱雲の一角が、本体から崩れて湾の上まで疾走して来ることがあるが、アスエラ半島の沖合までくると、突然炎に包まれたように爆発し、砕け散るのだった。不吉な海賊船が水平線上に持ち上げられて空中に浮き上がり、海と格闘して敗れていく姿をしのばせながら。

夜ともなれば、雲は高く空一面を覆い、下の静かな湾を漆黒の闇で包み、聞こえるものはただ、いきなり降り始めてはたと止む驟雨の音だけとなる。実際、雲に包まれたこの入江の夜については、この大陸のどここの西海岸の船乗りでもよく知っている。彼らの表現にしたがえば、ブラシド湾が黒いマントにくるまわつて眠りつくくと、空も、地も、海も、すべて世界から消えてしまふのだ。暗黒のドームが海の方でわ

ずかに切れているあたりに、ほんの数えるほどの星が残り、真黒な洞穴の口をのぞき込んで、いかのように、ごくかすかにまたたく。この広大な闇のなかでは、船はおのれの姿さえ見えぬままに進み、ただ頭上にはためく帆音のみが聞えてくる。神様ご自身の目でさえ——と船員たちは不敬極まる言葉で付け加える——この闇の中では、人間の手がなにをしようとしているか、お分りになるまい。だから悪魔を助けに呼ぼうとここでは平気なのだ、と。だが悪魔の力さえ、このような恐ろしい闇の力に敗れ去らないとは誰も保証できない。

入江の岸辺は、一面、急斜面だった。雲のヴェールのすぐ外側の、スラコ湾方面に通じる入口とは反対側に、イザベル諸島と呼ばれる三つの小さな無人島が陽光を浴びて浮かんている。この三つの島はそれぞれ、グレイト・イザベル島、リトル・イザベル島（この島は円形をしている）、そして最も小さいエルモサ島と呼ばれている。

最後のエルモサ島は、高さはわずか一フィートしかなく、広さは歩いて約七歩くらいで、灰色を帯びた平たい一枚岩というところである。驟雨のあとなど、焼けた燃え殻のように、水煙を発散させ、日中素足でこの岩に上がつたりする者はいない。リトル・イザベル島には、棘で荒れた分厚くふくれた幹をもった棕櫚の魔女といったいのみすばらしい棕櫚の老木が、荒砂の上に生氣のない葉を陰鬱に垂らしている。グ

レイト・イザベル島では、緑に覆われた谷の部分から新鮮な水が噴き出している。海面に平たく浮かぶ、エメラルド色の緑のくさびに似た長さ一マイルのこの島には互いに隣接した二つの森があり、その森の樹々の滑らかな幹の下には木蔭がひろびろと広がっている。谷は島の全長にわたって、小灌木でおおわれて、高い方の側は、深い入り組んだ裂け目になっており、他方は浅く窪んだ傾斜をなして、海岸の細長い砂原に続いている。

グレイト・イザベル島のこの低い側の一端に立つと、目は二マイル先のかたに、海岸線に斧で切り目を入れたように、スラコ湾に向かって入っている異様な割れ目に吸いつけられる。そこには、細長い、湖水のような水が延びている。一方の側には、脊梁山脈の、木の繁った短い突出部や峽谷部が、海辺まで直角に降下している。他方の側には、広大なスラコの大平原が、はるかかたに、乾いた霞の衣を付けた乳白色の神秘の中に身を没している。スラコの町自体——町の壁の先端や巨大な円屋根、広大なオレシンジの森の中の白い展望塔のきらめき——は、港からさほど離れてはいなかったが、山々と平野とはさまれて、この海からは見えなかった。

第二章

その港は、グレイト・イザベル島の海岸からよく見えたが、それが商業港である唯一の証拠

は、港湾の浅瀬に突き出ている木造棧橋の殺風景な四角い突端だけである。この棧橋ができたのは、大洋蒸気汽船会社（通称「大洋汽船」）がスラコの町をコストグアナ共和国への寄港地のひとつに選定してまもなくのことだった。この共和国の長い海岸線にはいくつかの港があったが、要地といってよいカイタ港を除いては、どの港も、岩だらけの海岸にある小さくて不便な入江か——その適例は南方六十マイルの地点にあるエスメラルダである——、さもなくば、風に吹きさらされ、寄せては返す波に悩まされる、あけつづるげの投錨地に過ぎない。

大洋汽船が、スラコの町の平穩を保っているこの平和の聖域にあえて足を踏み入れる気になったのは、おそらく、昔の商船隊を寄せつけたかった当地の気象条件そのものに原因するといえよう。アスエラ半島の内側の、半円形の広大な水域を軽くもてあそぶ変わりやすい風も、この大洋汽船の優秀な船団が備えている蒸気力を妨げることはできなかった。毎年のように、それらの真黒な船体が、アスエラを過ぎ、イザベル諸島を過ぎ、プンタ・マラを過ぎて、海岸を上下しては、入江に入入りするのだった——時の暴力以外は、いつさいが彼らの前には無力だった。これらの船の名前は、すべて神話にちなんだものだった。こうしてかつて一度もオリュムポスの神に支配されたことのなかったこの海岸で、それら神々の名がにわかに日常の会話にのぼるようになった。ジャーノー（（ジュピタの妻））

号は、船の中央部にある気持のよい船室で知られ、サターン(農耕)号は、愛想のよい船長と、船室が極彩色か金びかで豪華なことで知られていた。一方ガニミード(ゼウスにつかえた)号は、主として家畜運搬用に饜装されていたので、沿岸の船客からは文字どおり鼻つまみになっていた。海岸から一番奥まったところにある村の最もつましいインディオは、サーベラス(地獄の)号を最良にしたが、これは小さな黒塗りのほんほん蒸気で、なんの魅力もなければ取りたてていような設備もなく、その任務といえは、物騒な巨岩がすぐ近くにある森林地帯の海浜をのろのろと走り、数軒でも小屋がかたまっていると思えば、どこでも忠実に止まって、乾草の簾に包んだ弾性ゴムのわずか三ポンドくらいの包みまでも集めて行くことだった。

そして会社では最も小さい包みにも責任をもち、牛一匹さえ失うことなく、お客はただの一人といえども水難に遭わせたことがなかったのだ、大洋汽船の名は、この信頼性のゆえに大いに挙げたのである。陸地の自分たちの家にいるより会社にまかせて船に乗っているほうが、生命も財産もはるかに安全だというのがもっぱらの評判だった。

コスタグアナ全土のサービスを受け持つストラコ駐在の大洋汽船の所長は、会社の評判を非常に誇りとしていた。彼はよく、彼が口にする「会社は絶対に間違いません」という言葉で、その自信のほどを簡潔に表現していた。会社の

高級船員たちにとっては、それは厳しい命令の形を取った。「絶対に間違いを起こしてはいけない。たとえあちらでスミスの奴がどんなことをやらかそうと、こちらで間違いがあったら、わしは絶対に承知しないからな」

彼はまだ一度も会ったことはなかったが、スミスとは、ストラコから千五百マイルばかりもあるところに駐在する、同じ仕事に従事する所長仲間だった。「スミスがどうのこうのとわしに言うのは御免だぞ」

それから、急に静かになって、故意に無頓着を装って、その問題を打ち切るのだった。

「スミスときたらこの大陸のことなんか赤ん坊同様ににも知らないんだ」

ストラコの実業家や役人仲間では「練達無比のミツチエル氏」で通り、会社の船の船長たちからは、「こうろささいジョウ」と陰口されていたジョウゼフ・ミツチエル所長は、この国の人間や事物——コスタグアナのあれこれの事柄に、通じているのが得意だった。そのあれこれの事柄の中でも、彼が会社のきちんとした運営にとって最も障害になると考えていたのは、軍事的な性格を持った革命によってもたらされる政府の頻繁な交代であった。

この共和国の政治情勢は、このころは概して凶悪なものだった。敗北を喫して国外に逃れた党派の主だった連中は、船に半分くらい的小火器や弾薬を積んで、ふたたび海岸に姿を現わすこつを心得ていた。逃げるときのすつからかん

ぶりを考えると、こういう才覚はまったく驚嘆に値するものと、ミツチエル所長には思われた。「国外へ逃げる切符代すら満足に持っていないみたいだったが」と彼は言ったこともあった。が、やがて事情通になることができた。という

のは、ある記念すべき機会に、彼はある独裁者と数人のストラコの役人たち——政党の首領、税関長、警視總監といった、いずれも顛覆した政府の要人たちの生命を救うことを求められたからである。気の毒にセニョール・リビエラ（これが当の独裁者の名前だが）はソコロの戦いに敗れて、山越しに八十マイルを全速力で逃げて来た。致命的な報道の先を越すことに一縷の希望をかけたわけだが、跛の驛馬が相手では、もちろん、及びもつかないことだった。のみならず、驛馬は遊歩道の端まで来たところで完全につぶれてしまった。ここは、革命と革命の間の平和な夕方などに、軍隊の演奏がときに行なわれるところである。「そうなんです。あなた」とミツチエル所長はものものしく聞き直して言葉を続けるのだった。「その驛馬が具合の悪いときにつぶれてしまったことが、その不運な騎乗者に注意を惹きつける結果になったのです。その顔貌は独裁者の軍隊から脱走して暴徒の仲間に入っていた連中が覚えていましてね。ちようどストラコ支庁の窓を寄つてたかつて叩き壊している最中でしたよ」

その日の朝早く、ストラコの役人たちは町を暴徒のなすがままにまかせて、自分たちは突堤の

たもとに接して建っている頑丈な船会社の事務所に避難していた。そして、戦時中やむを得ず強行した苛酷な徴兵令を根に持った群衆から罵詈雑言を浴びせかけられたときには、独裁者は下手をするといまにも寄つてたかつて八つ裂きにされまじき気配だった。しかし天佑というのだから、ちょうどそのとき好漢ノストロモが、国営中央鉄道建設のために移入したイタリア人の労働者たちといしよに、その現場近くにいて、少なくともその急場だけは切り抜け、どうやら彼を救出することができた。結局はミッチェル所長が自分のボートで一行を会社の汽船に——それはミネルヴァ（ローマ神話。ギリシヤ）号だったが、ちょうど折よく港に入つて来たのだ——運ぶことに成功したのだった。

彼はこれらの紳士諸公を裏の堀の破れ穴からロープで吊り下ろさなければならなかったわけだが、船会社の建物の正面には、町から流れ出てきた暴徒が岸いっばいに広がって、口々にわめき立てているのだった。彼は、一行をせきたて、突堤の先端まで走らなければならなかった。いっさいを賭けた死物狂いの突進だった——ここでもまた男の中の男ともいふべきノストロモが、今度は会社専属の艇の船頭たちの先頭に立つて、暴徒の侵入から突堤を守り、一行が、突堤の向う端で、会社の旗を船尾に立てて待ちかまえているボートのところにたどり着く猶予を与えた。棒切れや石や弾丸が飛び交った。ナイフも投げられた。ミッチェル所長は、彼の左

の耳とこめかみの長い傷痕を、自分から進んで見せた。棒の先にくくりつけた剃刀の刃でやられた傷で、彼の言うところによると、「この辺の最も性質の悪い黒んぼ」が好んで使う武器だそうだ。

ミッチェル所長は、でつぷり肥った、年配の男で、高い尖ったカラーをつけ、短い頬髯をたくわえて、白いチョッキが大好きで、もったいぶつておつに構えてはいるが、根は非常に話好きの人物だった。

「これらの紳士諸公は」と彼は大いに真面目くさつて、眼を大きく見開いて言うのだった。「まるで兎のように走らなければなりません。走りましたがね。その——体面を重んずる者にとつては、その——不愉快極まる死に方もありますでしよ。わたしだって殴り殺されかねなかつたんですからね。あんなつたら、狂人も同然で、ね、あなた、区別なんかしませんからな。天佑と申しましょうか、会社の沖仲仕頭のおかげで助かりましたよ。町では彼のことをこう呼んでいるんです。わたしがこいつは見どころがあると思つてゐるのは、彼がまだイタリアの船で水夫長をやつてゐるときでした。いや、その船は大きなジェノアの船で、国有中央鉄道ができる前にスラクへ雑貨を積んでやつて来た、数少ないヨーロッパ汽船のうちの一隻なんです。こうするうちに彼は、非常に立派な友だちが何人かここでできて、船を下りてしまつたのです。

みな同じイタリア人でしたが、ひとつには恐らくもつと出世がしたいからでもあつたのでしょう。こう見えても、わたしは人間を見分ける目は高いつもりですよ。でわたしは彼を雇ひましてね。会社の艇の船頭たちの監督や突堤の管理をさせたのです。それが当時の彼の姿だったのです。が、しかし、彼がいなかつたらリビエラ閣下は生命がなかつたでしょう。このノストロモという男はまったく非難の余地のない男で、町じゅうの盗賊どもの脅威の的だったのです。当時、この町は、この地方全体からやつて来た盗賊や人殺しに手をやいていました——まったく野放図に横行するんですからなあ。この時は一週間前からスラクに集まつて来ていたのです。終末を嗅ぎつけたんですよ、あなた。その人殺しの暴徒の五十パーセントは大草原地帯から出て来た職業的な山賊どもでしたがね、あなたは、ノストロモの噂を聞いたことのない奴らは、ただの一人もありませんでしたよ。町のならばものはいええ、あなた、あの男の真黒な頬髯と真白い歯をちらつと見ただけで、もうたくさんというわけですね。一も二もなく降参ですよ、あなた。性格の力というものは大したものですねえ」

これらの紳士諸公の生命を救つたのは、ノストロモ一人の働きだつたと言つても過言ではないだろう。ミッチェル所長は所長で、終始彼らに付き添ひ、彼らがミネルヴァ号の一等談話室の豪華なビロードのソファに崩れるように腰